

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870914

研究課題名(和文)2000年代フランスにおける「ポスト構造主義以後」の存在論とその国際的受容の研究

研究課題名(英文)Research on ontology "after post-structuralism" in 21st century France and its global reception.

研究代表者

千葉 雅也(CHIBA, Masaya)

立命館大学・先端総合学術研究科・准教授

研究者番号：70646372

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、「ポスト構造主義以後」の存在論の顕著な動向である「思弁的实在論」の分析と紹介を行った。なかでもフランスのカンタン・メイヤスーを中心的に扱い、英語圏のグレアム・ハーマンらと比較しつつ、思弁的实在論の核心を「絶対的無関係」として明確化していった。かつ、その考察のなかで、ジル・ドゥルーズにおける関係の「切断」の重要性を示す議論の練り上げもなされた。最終的には、思弁的实在論における「無関係論」は、事物についての多様な解釈可能性を擁護する従来の人文学からは区別され、それに並置される哲学的観点として、事物の「無解釈的」な存在様態を捉えるものである、という結論に至った。

研究成果の概要(英文):This research project analyzed Speculative Realism, a notable movement in ontology after post-structuralism, and introduced it to Japanese scholarship. This project focused on Quentin Meillassoux; comparing him to other Anglophone philosophers such as Graham Harman, the primary concern of speculative realism revealed itself to be the problem of "absolute non-relation." At the same time, a re-reading of the work of Gilles Deleuze reinforced the importance of the "rupture" of relations within his work. My conclusions can be summarized thus: the theory of non-relation within Speculative Realism captures the "non-interpretive" nature of things; it is a philosophical point of view distinct from, and juxtaposed with, the humanities that have until now affirmed the possibility of multiple interpretations of things.

研究分野：哲学

キーワード：ポスト構造主義 思弁的实在論 メイヤスー ハーマン ドゥルーズ 無関係 変化 因果

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、2004年のジャック・デリダの死を象徴的な区切りとして、2000年代後半にフランスのポスト構造主義の流れが新たな様相を呈し始めた、という状況認識がある。構造主義～ポスト構造主義の成果は、日本も含めて世界的に、人文学の方法を更新させる刺激剤として受容されてきたが、2000年代後半からの英語圏の(すなわちグローバルな規模での)人文学においては、デリダやジル・ドゥルーズなどかつての巨星に代わって、新たに注目される哲学者たちがレパトリー化され、そのことによって、「ポスト構造主義」の「以後」、ないし「ポスト・ポスト構造主義」と呼びうる段階が可視的になってきた。

仮に2010年前後を目印にできるだろうこの段階においては、旧世代に対するオルタナティブな立場を意識的に明示するカトリーヌ・マラブーやカンタン・メイヤスー(なお当初は、名を「クァンタン」と表記していたが、図書出版の際して「カンタン」に改めた)らの仕事が参照される一方で、アラン・バディウやジャック・ランシエール、フランソワ・ラリュエルといった旧世代の「生き残り」への再評価もなされている。

なかでも、2007年にレイ・ブラシエ、イアン・ハミルトン・グラント、グレアム・ハーマン、メイヤスーの四人を発起人としてロンドンから発信が開始された「思弁的实在論 Speculative Realism」は、存在論の新動向として目立って活発なものであり、これを考慮することは、ポスト構造主義以後という段階を捉えるために不可欠である。

思弁的实在論をめぐるのは、英語圏では2010年前後に、盛んに言及される状況が生じていた。しかしながら同時期、日本の人文学や批評にその影響はほとんど及んでいなかった。この受容の遅れを取り戻すことを研究代表者は喫緊の課題と考え、今後日本からの特徴的な問題提起を行っていく素地をつくるために、思弁的实在論を集中的に読解・紹介する本研究が立案されるに至った。

研究代表者は、2012年に東京大学で受理されたジル・ドゥルーズに関する博士論文において、試行的に思弁的实在論に触れた。この博士論文は、事物の「関係」の「切断」という、従来ドゥルーズ(とフェリックス・ガタリ)に関して十分に考慮されてこなかったテーマの重要性を明らかにしたものであり、その過程で、ドゥルーズの切断を、思弁的实在論における「無関係」のテーマに引き寄せて解釈した。その試みの延長上で、本研究では、思弁的实在論において核心的であると目される「無関係」の「絶対性」に改めて照準を定めることとなった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ポスト構造主義以後の論況において顕著に集団的存在感を発揮して

いる思弁的实在論の国際的受容の状況を調査し、そこにおける「無関係」の「絶対性」を明確化することである。最終的には、「絶対的無関係」が現代人文学においてもつ意義を明らかにする。かつ、思弁的实在論周辺の文献を国内へと紹介することに努める。

また、かつてのポスト構造主義が文化・社会論に多大な影響を与えたことをふまえ、ポスト構造主義以後の観点から可能な文化・社会論の可能性を探ることも行う。

本研究の成果発表は日本語および英語でなされる。日本語発表では、国内に未紹介の関連文脈の説明も十分に行う。英語発表には、ポスト構造主義以後に関する日本からの問題提起を今後グローバルな議論の場へと橋渡しするための役割をもたせる。

3. 研究の方法

とくにメイヤスー『有限性の後で 偶然性の必然性についての試論』(Quentin Meillassoux, *Après la finitude. Essai sur la nécessité de la contingence*, Seuil, 2006/2012)とハーマン『ゲリラ形而上学』(Graham Harman, *Guerrilla Metaphysics: Phenomenology and the Carpentry of Things*, Open Court, 2005)を精読し、前者の「相關主義」批判、後者の「オブジェクト」の定義について考察する。関連する二次文献の収集・分析を行い、一つの文化現象としての思弁的实在論を、それへの批判的観点も示しながら日本国内へと紹介していく。

紹介活動において最重要であるのは、メイヤスーの主著『有限性の後で』の翻訳であり、研究期間内での出版を目指す。メイヤスー氏を初めとする関係者にコンタクトをとり、文献読解を深める補助として対話を行う。

総合的に、「無関係論」に関する単著を執筆し、研究期間内での出版を目指す。

4. 研究成果

【2013年度】

初年度となる2013年度には、思弁的实在論の集中的読解に着手し、博士論文での考察をさらに精緻化した。6月、台北で開催のAsian Frontiers Forum: Questions Concerning Life and Technology after 311、およびThe First International Deleuze Studies in Asia Conferenceにおいては、ドゥルーズ(とガタリ)における切断の概念を因果性の切断として解釈する可能性を示し、このことを、メイヤスーが主張する自然法則総体の非因果的な変化可能性、また、ハーマンにおける、全因果性からの「オブジェクト」の「退隠」という論点へと接合した。また、思弁的实在論以外でも、ポスト構造主義以後には広く「因果性の切断」を問題にする傾向があること、たとえばマラブーの「破壊的可塑性」の議論がその一例であると指摘した(学会発表

）

この発表機会には、思弁的实在論に関心をもつ李鴻瓊氏（Hung-Chiung LI、国立台湾大学）ら、台湾の現代思想研究者のネットワークとの協力関係が開始された。

以上でなされたメイヤサー、ハーマン、マラブーの解釈を含めて博士論文を大きく改稿し、ドゥルーズを「切断論」の枠組みで再提示する単著『動きすぎたはいけない ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』を10月に刊行した（図書）。そこでは、ポスト構造主義以後の予兆をドゥルーズ（とガタリ）のテキストの細部に見出している。本書は紀伊國屋書店が主催する「紀伊國屋じんぶん大賞2013」において大賞を受賞した。出版後は、本書に関する対談や解説の機会を多く得ることができ、そこでは、ポスト構造主義以後的な観点に対する関心の惹起にも努めた。

12月には、東京大学でのシンポジウム「フィクションと出来事」において、メイヤサーの非因果的な変化概念に対しその政治的意義の乏しさを指摘する左派からの批判について発表した（学会発表）。

加えて、『現代思想』誌の2014年1月号では、「ポスト・ポスト構造主義」の特集企画に関わり、清水高志氏（東洋大学）との対談が掲載された（雑誌論文）。『現代思想』誌では、現代思想総論に当てられる毎年の1月号において思弁的实在論の状況を紹介することが、その後も続くことになる（その初回は本研究開始以前の2013年1月号であり、研究代表者は小泉義之氏（立命館大学）とメイヤサーに関する対談を行っていた）。本研究期間では『現代思想』誌が、思弁的实在論の解説・翻訳の主な舞台となった。

当初、本年度にはメイヤサー氏に面会するための渡仏を予定していたが、単著刊行に注力したため、延期されることになった。

【2014年度】

2014年度には、メイヤサーの主著『有限性の後で』の翻訳作業が本格化した。また、思弁的实在論に加えて、より広範囲の動向である「新しい唯物論 New Materialism」の調査に注力し、前者との差異の提示を行った。

6月には、大阪大学での The 2nd International Deleuze Studies in Asia Conference に参加し、「無関係」の位置づけをドゥルーズの論文「ミシェル・トゥルニエと他者なき世界」に立ち戻って考察した。注目されたのは、自己との間主観性をなさない他者（別世界にいるかのような他者）が、まったく外的に自己に「衝突」という事態である（学会発表）。絶対的な意味での「無関係」は、予期も理解もできない力に曝される／そうした力をみずから発するとはどうということかという問題と関連している。

同月、パリでメイヤサー氏と面会し、「偶然性」など氏の主要な論点について再説明を得ると共に、今後刊行が予定される『神の不

在』においてなされる「全人間の復活」に関する議論についても、進行中の考察の一端を知ることができた。また、パリ第4大学で行われた Theatre, Performance, Philosophy Conference 2014 に参加し、現代において哲学を「いかに語るか」を多様に考える議論に触れ、登壇者の一人であったマラブー氏との意見交換を行うこともできた。

年度の後半には、『現代思想』誌2015年1月号での特集「現代思想の新展開 思弁的实在論と新しい唯物論」に関わり、岡嶋隆佑氏（慶應義塾大学博士課程）を聞き手とする研究代表者へのインタビューが掲載された（雑誌論文）。そこでは、関連人物・文脈を詳しく紹介しつつ、思弁的实在論のニヒリズム的傾向と、新しい唯物論における非人間の事物までを含めた他者との共存の倫理とを対照的と見なす構図を提示した。

思弁的实在論における「無関係」は、現代人文学においてしばしば当然視される共存の倫理に対する批判として機能するのである。その意義の考察が来年度にも継続される。

他方、本年度にはまた、意味・根拠づけの連鎖に対して「無関係」な存在様態、たとえば、言語表現のリズムなどの「非人間性」をポスト構造主義以後の一論点として追究し、文芸批評に応用した（雑誌論文）。

国内においてポスト構造主義以後への関心は、アートや建築などの領域で散見されるようになった。その状況は、たとえば『10+1 web site』2015年2月号の特集「空間からエレメントへ ニュー・マテリアリズムの現在」などにおいて確認できる。

なお、本年度には、前年度に出版した『動きすぎたはいけない』が第5回表象文化論学会賞を受賞した。

【2015年度】

最終年度である2015年度には、これまでの考察を総合し、思弁的实在論における「無関係」の文化・社会的意義を明らかにする作業へと向かった。

年度後半にはメイヤサー『有限性の後で』の翻訳が完成（大橋完太郎・星野太との共訳）。議論の構図を示す解説文は研究代表者が執筆し、2016年1月に出版した（図書）。

本年度において「無関係」概念は、従来の人文学に対して違和的でありながらも人文学的な何事かを示唆するものとして扱われるに至った。ここでの従来の人文学とは、デイルタイ的な意味での解釈学的人文学を意味する。人文学は多様な解釈の共有を目指す。他方、思弁的实在論での「無関係」は、解釈共同体の外部を主題化する。そこで本年度にはまず、解釈共同体の外部を「秘密」概念によって主題化し、思弁的实在論を念頭に置いた文化・社会論は、どこかに秘密の閉域を確保すること を支持するものであるという見地に至った。この見地から、誰の目にも明らかな「エビデンス」の重視があらゆる

領域で「形骸的」に肥大している現代社会への批判(雑誌論文)、また、建築論における過剰な空間共有志向への批判(図書)を行った。

本年度は、総合的な考察を英語で発表することに注力し、10月には台湾において、エビデンスの問題と思弁的实在論の関係について英語発表を行った(学会発表)。12月には、ロンドンのキングストン大学 CRMEP(現代ヨーロッパ哲学研究センター)にて、日本におけるドゥルーズ解釈史を紹介しつつ、「無関係論」の観点からドゥルーズを再読する可能性について発表した(学会発表)。この機会には、マラブー氏、ピーター・ホルワード氏との意見交換が行われた。

最終的に本研究では、解釈に対して絶対的に無関係であるもの = 「無解釈的なもの the non-interpretive」という概念を形成した。

この概念は、際限なく不完全な解釈を惹起する要因としての解釈の外部 = 「解釈不可能なもの the uninterpretable」(解釈の否定的動因)とは区別される、絶対的に解釈の動因にならないような外部を指している。従来の人文学においては、事物について多様な解釈可能性を肯定することが基本線であったとすれば、事物一般について理念的に「無解釈性」を想定する思弁的实在論は、従来の人文学からの逸脱であると言える。

さらには、解釈概念を「社会的構築」と捉え直し、以上のことを一種の社会構築主義批判としても提示した。無解釈的なもの(者)は、解釈 = 構築による共存へのあらゆる配慮の手前に位置し、たんに力を一方的に放出している存在である。問題は、ただそれ自体として発揮される力そのものの次元であり、それを直視することこそが、思弁的实在論における無関係論の(脱)社会的意義である。

以上の議論総体について、ラリュエルによる「非哲学」プロジェクトを参考にし、「非人文学」という呼称を案出した。従来解釈学的人文学と、非人文学とを並立的に同時作動させる、そのような立場が本研究の最終的な立場として形成された(図書)。

当初予定していた「無関係論」の単著は研究期間内には刊行できなかったが(執筆中である)、その主な論点は、本年度の中心的業績である図書に含まれている(これは学会発表の改稿版である)。

最後に、未解決の課題・新たに浮上した課題を述べた上で、総合考察を記す。

思弁的实在論における「無関係」概念の内実は、本研究においては、非因果性であると見定められた。このことは、まずメイヤスーに即して確認されたが、次第に、ハーマンに関しても、互いに絶対的に無関係なオブジェクトという単位をどのように切り出すかは絶対的に基準なしであり、何の因果性にもとづかずオブジェクトの区別が再編成されうる、という理解が形成された(図書)。

メイヤスーにおいては世界の法則系全体がまったく非因果的に(偶然的に)出来る。ハーマンでは、世界内的なオブジェクトの切り分けがまったく非因果的である。両者において共に問題であるのは、ある「区域」「領域」「空間」が成立する際の絶対的な非因果性であると考えられる。この仮説を、今後さらなる吟味にかけなければならない。ともかくも、問題とされるべきはおそらく「時間ではない」ということ、そしてそれは「時間」がより重く扱われる傾向(ベルクソン、ハイデガーなど)へのアンチとして位置づけられるだろうこと、これが示唆されている。

新たに浮上したこととしては、ラリュエルの読解・紹介の必要性が挙げられる。「絶対的無関係」という論点に関しては、アレクサンダー・ギャロウェイ氏が雑誌論文で指摘するように、ラリュエルの「非哲学」は先駆的なアプローチを示していたと見なせるからである。

本研究では、思弁的实在論を中心とした考察によって、ポスト構造主義以後には、絶対的非因果性としての「絶対的無関係」という論点が最重要のものの一つとしてあり、それは従来解釈学的人文学とは違和的な「無解釈性」でもあるということを示した。かつそれは、何らかの哲学的「空間論」を求めていると考えられるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

アレクサンダー・ギャロウェイ / 千葉雅也「権威(オーソリティ)の問題 思弁的实在論から出発して」小倉拓也・千葉雅也訳、メール対談、『現代思想』第44巻1号、44-51頁、2016年、査読無。

大澤真幸・千葉雅也・吉川浩満「絶滅とともに哲学は可能か」鼎談、『現代思想』第43巻13号、28-45頁、2015年、査読無。

千葉雅也「バロック的前提から過少の言葉へ」、『現代思想』第43巻9号、132-135頁、2015年、査読無。

千葉雅也「アンチ・エビデンス 90年代のストリートの終焉と柑橘系の匂い」、『10+1 web site』、4月号、2015年、査読無。
<http://10plus1.jp/monthly/2015/04/index03.php>

千葉雅也・岡嶋隆佑「思弁的实在論と新しい唯物論」インタビュー(聞き手:岡嶋隆佑)、『現代思想』第43巻1号、70-88頁、2015年、査読無。

千葉雅也「言語、形骸、倒錯 松浦寿輝

『明治の表象空間』について』、『新潮』第 111 巻 9 号、226-230 頁、2014 年、査読無。

千葉雅也・清水高志「ポスト・ポスト構造主義のエステティクス」、対談、『現代思想』第 42 巻 1 号、22-36 頁、2014 年、査読無。

〔学会発表〕(計 9 件)

Masaya CHIBA, "The Deleuzian Negativity Revisited," Deleuzian Aftereffects: Interventions from Japan, Kingston University CRMEP (Center for Research in Modern European Philosophy), London (UK), Dec 10, 2015.

Masaya CHIBA, "Materiality in Limbo," 2015 Asia Theories International Symposium, Waiting: Time / Theory / Action in Global Asias, National Chung Hsing University, Taichung (Taiwan), Oct 2, 2015.

千葉雅也「文化現象としての思弁的実在論(序説)」、第 18 回新潟哲学思想セミナー、新潟大学(新潟県・新潟市)、2015 年 1 月 13 日。

千葉雅也「強度・空間・時間」、第 37 回日本精神病理学会シンポジウム「強度の精神病理」、東京藝術大学(東京都・台東区)、2014 年 10 月 5 日。

Masaya CHIBA, "Desert Island and 'Friday': An Approach to the Problem of Alterity in Deleuze," The 2nd International Deleuze Studies in Asia Conference, Osaka University, Osaka, Toyonaka-shi, Jun 8, 2014.

千葉雅也「「ポスト構造主義以後」の観点から情報社会を考察する」、NTT コミュニケーション科学基礎研究所オープンハウス 2014、NTT コミュニケーション科学基礎研究所、京都府・相楽郡、2014 年 6 月 5 日。

千葉雅也「クァンタン・メイヤスーの「思弁的唯物論」に対する諸批判の検討」、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻シンポジウム「フィクションと出来事」、東京大学、東京都・目黒区、2013 年 12 月 22 日。

Masaya CHIBA, "The Two Sides of Deleuzian Image of Thought: Universal Connection and Asignifying Rupture," The First International Deleuze Studies in Asia Conference, Tamkang University, New Taipei (Taiwan), Jun 1, 2013.

Masaya CHIBA, "The Philosophy of

'Partial Non-Relations': Seen from the Cultural Critique after Post-Structuralism in Japan," Asian Frontiers Forum: Questions Concerning Life and Technology after 311, National Taiwan University, Taipei (Taiwan), May 30, 2013.

〔図書〕(計 5 件)

クァンタン・メイヤスー『有限性の後で偶然性の必然性についての試論』千葉雅也・大橋完太郎・星野太訳、総 236 頁、人文書院、2016 年。

大澤真幸編・赤川学・風間孝・櫻村愛子ほか(計 11 名、論集のため有意な著者順序無)『岩波講座 現代 第七巻 身体と親密圏の変容』、担当範囲：千葉雅也「思弁的実在論と無解釈的なもの」、107-129 頁、総 304 頁、岩波書店、2015 年。

鶴飼哲・宇野邦一・江川隆男ほか(計 33 名、論集のため有意な著者順序無)『ドゥルーズ 没後 20 年 新たなる転回』、担当範囲：小泉義之・千葉雅也「ドゥルーズを忘れることは可能か 二〇年めの問い」、対談、2-24 頁、総 272 頁、河出書房新社、2015 年。

門脇耕三編集協力、青井哲人・猪熊純・区分功一郎ほか(計 15 名、論集のため有意な著者順序無)『「シェア」の思想ノまたは愛と制度と空間の関係』、担当範囲：千葉雅也・門脇耕三「悪いこともできる建築 秘密とモノ」、インタビュー(聞き手：門脇耕三)、232-254 頁、総 360 頁、LIXIL 出版、2015 年。

千葉雅也『動きすぎではいけない ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』河出書房新社、総 369 頁、2013 年。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

千葉 雅也 (Masaya CHIBA)

立命館大学、先端総合学術研究科、准教授

研究者番号：70646372

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：